異世界チートチノちゃん

ヲタ神NEO

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

転生した少女がチノちゃんになり、
星王と暴虐の魔王の力を持って、
強さも可愛さもチート級の存在になる
そして異世界を飛び悲しい運命を滅ぼす
チノちゃんだからといってただ可愛いだけだと思うな？ｗ
※異世界チート魔術師に音が似てますが一切関係ありません
誤字脱字等は随時報告して頂けると助かります

目　次

プロローグ ―――――――――――――――― 1
ｅｐｉｓｏｄｅ：０１　日常への襲撃と新たなる世界 ―――― 5
香風智乃は勇者である編
ｅｐｉｓｏｄｅ：０２　転移したら神やら勇者やらが出てきて助けを請われました ―――――――――――――― 25
ｅｐｉｓｏｄｅ：０３　崩れ始めた世界 ―――――――― 36
ｅｐｉｓｏｄｅ０４：狂い始めた歯車 ―――――――― 47
ｅｐｉｓｏｄｅ：０５　共にあれば、その先に光あり ―――― 56

プロローグ

私は……これで良かっただろうか

いつもの通学路
いつもの横断歩道
そして、いつも通りの信号待ち
この場所は公園や図書館、
子供向けの娯楽施設などが近く
また、商業施設もあり
平日の通勤通学の時間帯でも
子連れの母親が多くいる
この信号は少し長めだが
交通量がかなり多いから仕方がない
短い時間ではあるが
私はスマホを鞄から取り出し
ＳＮＳを開く
同じゲームをやってる人が推しのキャラを当てたとか
こんなイラスト描いてみましたなどの事が
書き込まれている
それに対する反応も良いようだ
私は、今日もいつも通りだなって思っていた
しかし、次の瞬間
母親「ちょっと、タカシ……なにしてるの!?」
その声が聞こえた瞬間
私は顔をあげた
そこには3、４歳の少年が

赤信号にも関わらず
横断歩道を渡り出している
母親は突然の出来事に驚き、動けなくなっている
その光景を見て驚愕したが
道路の先を見た瞬間、今以上に驚愕した
そこには走行している４ｔトラックがあった
このままでは少年が轢かれてしまう
そう思った瞬間
刹那、私の身体は動いた
少年の元に駆け寄り
その勢いで少年を押し出す
そして……
衝突の瞬間
身体の右側に走る強い痛み
その勢いで浮かぶ身体
滞空時間は一瞬だが
体感としてはものすごく長く感じた
その永い刹那の中
景色は流れる
そして目を閉じた
瞼の裏にはこれまでの思い出が
走馬燈のように再生される
このまま死ぬのか……
死の覚悟をした瞬間
頭から地面に落ちた
頭に衝撃が走る
これ死んだな
そのまま、意識を手放した
◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆
私「う、ん……ここはどこ？」
周りを見渡すと地面も空も真っ白な世界だ

すると、誰かがいるのに気が付いた
???「おぉ、引き寄せれた！」
私「誰？」
???「あたしはね、う～ん？
なんていえばいいかな？
わかりやすく言うと神かな？」
私「神？」
神「そうそう」
私「何か、用ですか？」
神「用も何も、
あなた、男の子助けたでしょ」
私「あー、確かにそんな記憶が……」
神「それに関してなんだけどね、
命を助けたことに対してね
お礼をしようと思ったんだ～」
私「お礼？」
神「うん、簡単に言うと
転生させてあげる
どういうふうにしたい？」
私「そう言われてもな……」
神「遠慮しなくていいよ！
好きに言って！」
私「じゃあ、遠慮なく……
キリトとアノスの力を持ったチノちゃん……
キリトは本編、ゲームに出てくる
武器やソードスキル、神聖術の全部を使えて
アノスは全部の力と全部の武器で……
転生先はごちうさ
あと、記憶は消して下さい
あっ、えっと……ついでに
なんかあった時に力の記憶と

キリト、アノスそれぞれの
記憶を思い出せるようにして下さい」
神「意外と謙虚だね～」
私「えっ？いや、結構欲張ったつもりなんだけど」
神「え～、だってこう言うの
リムルになりたいとか
神になりたいとかっていうものじゃない？」
私「そうなの？」
神「いや、分かんない？ｗ」
私「分かんないんかい？ｗ」
神「じゃ、望み通り叶えてあげる」
すると神は私の額を撫でる
その瞬間、私は糸が切れたかのように倒れる
そして、浮遊感に襲われる
◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆
主人公の年齢や名前はあえて決めていませんが
一応、高校生位のつもりで書きました

ｅｐｉｓｏｄｅ：０１　日常への襲撃と新たなる世界

私は香風智乃。
１５歳の中学生です。
家は喫茶店を経営していて、
いつも、私とココアさん、リゼさんと
切り盛りをしています。
学校も楽しいです。
マヤさんやメグさんといる時間は
とても楽しいです。
また、千夜さんやシャロさんといる時間も
とてもかけがえないです。
そして、頭の上にはおじいちゃんがいます。
元々、ティッピーと言ううさぎを飼っていたのですが
おじいちゃんが亡くなったあと
何故かティッピーがおじいちゃんになっていました。
そして、私には夢があります。
それは立派なバリスタになることです。
この大切でかけがえのない日々に
幸せを感じていました。
しかし……そんな日々に闇が訪れるなんて
私は思いもしませんでした

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

いつもの昼下がり
お客さんもまばらになりだして
今はお客さんはいません
私とココアさんでカップやお皿などを拭いて、
リゼさんがテーブルやカウンターを拭いていました。
チノ「リゼさん、そっち終わったら

地下からコーヒー豆持ってきて貰えますか？」
リゼ「あぁ、分かった
ひとつでいいか？」
チノ「はい、ひとつでいいです」
リゼが最後のテーブルを拭くと
地下室にコーヒー豆を取りに行きました
チノ「……ココアさん、さっきから拭き方が雑です
まばらになってますよ、
ちゃんと拭いてください」
ココア「ごめん、チノちゃん
拭き直すね」
チノ「しっかりして下さいね」
ココア「はーい！」
チノ「返事だけは立派ですね」
ココア「エへへ」
すると、辺り一帯に殺気に包まれる
私はその殺気に当てられてビクってなりました
ココア「どうしたの、チノちゃん？」
ココアさんは気が付いてないようでした
チノ「いえ、なんでもありません……
ちょっと、外を見てきますね」
ココア「うん、分かった」
ちょうどその時リゼさんが戻ってきました
リゼ「持ってきたぞーって、
チノ、どうしたんだ？」
チノ「ちょっと外を見てこようと思って……」
リゼ「あぁ、分かった」
そして、私はお店の扉を開けて外に出る
そして、空を見上げて私は固唾を呑んだ
さっきまで青空が広がっていたのに、
そこには黒く分厚い雲が空を覆っていた

その瞬間、頭に痛みが走る
それも強い痛み
その後、力が流れ込む感覚と
記憶が流れ込む感覚があり、
私は膝から崩れ落ちる
その事に気が付いたのか
お店の中からココアさんとリゼさんが出てきて
わたしに駆け寄って来ました
ココア「チノちゃん！」
リゼ「チノ、大丈夫か！」
チノ「……大丈夫です
お二人は早く中に入ってください
危険です」
ココア「ダメだよ、チノちゃんも中に入ろう！」
リゼ「そうだ！
そんなに危険ならチノも危ないってことだろ！」
チノ「いえ、私はここに残らないと行けないんです
早く中に入って下さい」
ココア「チノちゃんを置いてくなんて、できないよ！」
リゼ「チノが残るならわたしたちも残る」
こんなに言っても聞いてくれませんね
しょうがないですね
チノ「分かりました……
皆さんをラビットハウスに集めて下さい
出来れば五分以内です
早くして下さい」
ココア「うん、分かった」
リゼ「了解！」
二人は千夜さんやシャロさんマヤさんやメグさん達を
連れて来るだろう
チノ「なら、私は私の為すべきことしましょう」

私は遠視透視《リムネト》を使い街の外れの方を見る
すると、そこには空中を飛び
こちらに迫ってくる五つの影がある
チノ「チッ、敵襲ですか
それも五人ですか……
分が悪いですが私が全員滅ぼしてあげましょう」
???「立ちました！」
背後から声が聞こえた
私は後ろを向いた
そこには黒髪のショートヘア
そして、頭頂部にはアホ毛がある
女の子が立っていた
来てる黒のオーバーサイズのTシャツには
白い文字で大きく『死亡』と書いている
手には鎌を持っているがさほど大きくはなく
鎌の反対側にはピコピコハンマーみたいのが付いている
チノ「誰ですか？」
???「私はあなたの死亡フラグです！」
チノ「死亡フラグ？あなたふざけてるんですか？」
私はその女の子に魔眼を向ける
そして、根源と深淵を覗く
チノ「死亡フラグってことは死神ですか？ 」
フラグ「そうですね」
チノ「確かにあなたの根源は神の根源で
間違いありません
死の因子も確かに感じられますが
死神にしては少なすぎます
もしかしてあなたは死神の落ちこぼれですか？」
フラグ「ギクッ！」
チノ「その様子だと図星のようですね」
フラグ「わ、私が現れたからにはあなたは死にます！」

チノ「ふざけるのも大概にして下さい
私は死にませんよ
もし、死が目の前にあるならこの手で滅ぼします！
大切な人を助けるために！」
フラグ「ことごとく、死亡フラグを消しましたね
そうしたら、私は消えるんですよ」
チノ「……そうですか、
仲良くなれそうと思ったんですが
仕方ありません」
私は右手を空に掲げる
チノ「魔王城召喚《デルゾゲード》！」
すると私の上に巨大な物体が現れ、
その真下には大きな影が出来ている
フラグ「えっ？えーーーー！」
チノ「来てください」
すると、私の掲げた右手に漆黒の闇が集まり、
長く伸びて剣の長さほどになる
そして、その影が裏返るように
漆黒の剣が現れる
チノ「理滅剣　ヴェヌズドノア！
あなたの死神としての死の因子を断ち切ります」
私は容赦なく死亡フラグさんに斬り掛かる
死亡フラグは突然のことに起こったことを理解出来ず
そのまま斬られる
フラグ「キャーーーー……あれ、何ともない」
チノ「当たり前じゃないですか
私が斬ったのはあなたではなく
あなたの中の死の因子です
どうしますか？神の宿命も断ち切りますか？」
フラグ「……え、そこまでは良いです」
チノ「分かりました」

そして、私は理滅剣から手を離す
すると、理滅剣は消え
同時に上空にあった魔王城も消える
フラグ「夢、だったのかな？」
チノ「夢じゃないです、現実ですよ
今から敵が来ます
迎撃を手伝っていただけますか？」
フラグ「は、はい！分かりました！」
チノ「じゃ、これを差し上げます」
そして、私は収納魔法を開き
魔法陣に手を入れる
そこから出したのは
一見槍の様にも見える一振の大鎌
チノ「これは時神の大鎌と言います
持ち主を選ぶようで私とは相性が悪いようです
あなたは神なので多分相性が良いと思います」
死亡フラグさんはその大鎌を手に取る
フラグ「えっ？手にすごく馴染む
ずっと愛用してきたような感じがします」
チノ「なら、良かったです
使い方は大丈夫ですか？」
フラグ「はい、持った瞬間に流れ込んできました」
チノ「分かりました
名前を付けてあげますか？」
フラグ「えっ？」
チノ「いつまでも死亡フラグだと
私が嫌なんです」
フラグ「あっ、ですよね」
チノ「何か要望がありますか？」
フラグ「いや、特にはありません」
チノ「分かりました

うーん？元死神で時を操るチカラを手に入れたから……」
私はふと、彼女のTシャツを見る
チノ「時神シホなんてどうでしょうか？」
フラグ「！あ、ありがとうございます……
私は時神シホ……」
チノ「フフフ、改めて
私は香風智乃です」
シホ「時神シホです、よろしくお願いします！」
すると、聞き慣れた声が聞こえた
ココア「チノちゃ～ん、連れてきたよ～」
チノ「ありがとうございます
青山先生と凛さんも連れてきたんですね」
ココア「あれ？その子は？」
チノ「私の友達です」
シホ「初めまして、時神シホです」
ココア「私は保登心愛！ココアって呼んでね！
よろしくね！シホちゃん！」
チノ「自己紹介は後にして下さい」
そして、私は大声で言う
チノ「皆さん、早くラビットハウスの中に入って下さい！」
私は再び遠視透視《リムネト》を使う
チノ「もう少しで着きますね」
ココア「チノちゃん……」
チノ「ココアさん、早く入って下さい
死にますよ」
ココア「えっ？」
チノ「私はココアさん達を失いたくはありません
なので早く中に入って下さい」
ココア「……でも、チノちゃんは？」
チノ「大丈夫です、私は絶対に死にませんよ」
ココア「うん……」

チノ「そうこうしてるうちに敵が来ました
早く入って下さい」
ココア「うん……」
私はココアさんが入るのを見届けて、
ラビットハウス全体に反魔法や結界などを張る
すると五人の人物が私の目の前に降り立つ
チノ「あなた達は何者で何しに来たんですか？」
A「俺たちはこの世界を支配するものだ」
B「そこのガキまさか
抵抗しようとは思ってないだろうな？」
チノ「そのまさかですよ
あなた達のようなザコに支配されたらたまりませんよ」
C「あ？舐めたこと言ってんじゃねぇよ」
うるさいですね
そう思いながら私は
Eの背後に魔法陣を描く
チノ「獄炎殲滅砲《ジオ・グレイズ》！」
その魔法陣から漆黒の太陽が放出される
E「グァァァァァ」
F「な、なんだと」
Eは灰と化した
すかさず私はFに魔黒雷帝《ジラスド》を放つ
Fは間一髪避ける
F「そんなのが当たるわけないだろ」
私はその言葉を無視して魔黒雷帝《ジラスド》を乱射する
F「そんなに撃った所で俺は倒せねぇよ」
チノ「足元もろくに見れないなんて
ほんとに愚かですね」
石畳には魔黒雷帝がまだ残っている
よく見ると魔黒雷帝は何かの文字を象っている
チノ「殲黒雷滅牙《ジ・ノアヴス》」

その漆黒の雷はFの身体に纏わりつき
根源をも喰らい尽くす
私はそれを一瞥してCに魔眼を向ける
その様子を見て、唖然としたが
ＡＢＣは臨戦態勢をとり、
それぞれ隙なく武器を構える
Ａ「なんだよ、とんだ化け物じゃねぇか」
Ｂ「ガキ一人にこんなざまだとあの方に
面目立たねぇぞ」
あの方？
彼らは誰かに頼まれたのでしょうか
シホ「チノ……凄いですね」
チノ「ただの肩慣らしです
その上まだ力の十分の一も
戻ってないので
本気が出せないです」
シホ「えー……」
Ｃ「十分の一だと……」
シホ「これだと私の出る幕ないじゃないですか！」
チノ「……なら、お店の前に立って、
流れ弾の対応をして下さい」
シホ「了解しました」
シホは下がって店の前に立つ
そして、私は両手を真下に向け、
何かを掴むようにする
私はイメージをする
数々の世界を救い
多くの人に愛された
英雄……剣士の姿を
すると、私の服が光に包まれて変化する
黒のロングコート

その中には黒のシャツ
黒のボトムス
黒のブーツ
黒のグローブ
へと変わった
右手には漆黒の剣が握られる
しかし、それは完全な黒ではなく
夜空のような優しさのある色だ
左手には青の透き通るような
まるで氷のような剣が握られる
剣に装飾された薔薇が華やかさと儚さを演出する
チノ「黒の剣士　チノです！
どこからでもかかってきて下さい！」
Ａ「遠慮なく、ぶち殺してやる」
Ａは一気に距離を近づける
そして、剣を振り下ろす
その瞬間、地面蹴り
私は夜空の剣を背中に構え
青薔薇の剣を突き出す
チノ「ダブル・サーキュラー！」
青薔薇の剣の突きで相手の剣を弾く
そして、背中に構えた夜空の剣を振り下げる
見事相手に命中し、
夜空の剣が相手の左肩から入って
右脇腹から出る
そのまま、相手の背後に着地する
着地した瞬間
斬り口から相手の身体が二つに別れて
上半身側が地面に落ちる
下半身側からは血が吹き出したあと
力無く崩れ落ちる

夜空の剣に付いた血を
軽く払って落とした後
夜空の剣の切っ先を残り二人の方に向ける
チノ「次はあなた達です
私としてはどちらか生かして
情報を吐かせるつもりですが
どうしますか？」
B「わ、分かった
話す、話すから殺さないでくれ！」
C「お望みの情報はなんでも話しますから！」
私は二人に慈悲深い顔を向ける
チノ「分かりました、
一番有益な情報を吐いた方を助けましょう」
B「お、俺たちは別の世界から来たんだ」
C「そして、他の世界に行き侵略する組織だ」
チノ「なるほど、で、私たちの世界にやってきたと」
B「あぁ」
チノ「ちなみに聞きますが、あの方とは？」
C「俺たちのボスだ」
チノ「へぇー、あまり興味はありませんが
異世界転移出来る能力は凄いですね
その能力はボスのものですか？」
B「いや、ゲートを開いたのは俺たちだ」
C「五人で行使できるものだ」
チノ「と言うことは、それは魔法ですか？」
B「あぁ」
チノ「術式を見せて下さい」
C「分かった……」
この時私はまだ気がついてはいませんでした
今からおきる事に
ガチャ

音のした方を向いた
するとそこには
反魔法を破り扉を開けたココアさんの姿があった
チノ「ココアさん？
なんで勝手に出てきてるんですか？
中にいて下さいって言ったはずです」
B「今だ」
C「あぁ」
私はこの二人に尋問していて
気がついていなかったのです
二人はまだ諦めていなかった
抵抗の意思がまだあることをこの瞬間に知った
短刀を私に向けて刺そうと突き出した
ココア「チノちゃん！」
その瞬間ココアさんが私を押し倒した
そして……グサッ
ココア「ガハッ……」
ココアさんの口からは血が溢れ出る
C「チッ、邪魔しやがって」
そして、ココアさんを刺した男は
ココアさんを蹴り飛ばした
ココア「ウっ……うぅー」
チノ「ココアさん！」
私は剣を消して
ココアさんの元に駆け寄る
そして、抱き抱える
チノ「ココアさん……申し訳ございません…
私の慢心が起こしたことです」
ココア「良かっ……た……チ…ノちゃん……が
無事で……助け……られて……お姉……ちゃん…
らしい……こと、で…きたか……な……？」

チノ「！しっかりして下さい、ココアさん……
死なないでください！
……お姉ちゃん、お願いです……
まだ、お姉ちゃんらしいことしてしてもらってません
もっと、私といて下さい」
涙を堪えた言葉は届いただろうか
ココア「チノちゃん……」
ココアさんの心臓が止まった
すかさず私はココアさんに
時間操作《レバイド》の術式を張る
そして、死後一秒でココアさんの時間を止める
私は俯いたまま立ち上がる
チノ「貴様ら、死ぬ覚悟は出来ていますよね」
そして、私の魔眼で敵を睨みつける
チノ「私が子供だからと言って、
楽に死ねるとは思うな」
私はこの怒りの衝動のまま魔法を行使する
森羅万掌《イ・グネアス》の魔法陣を描き、
そこに手を入れる
Bを握り締めるように
手を握る
B「ぐ……ガハっ……」
更に握る手に力を入れる
B「あ〝あ〝あ〝あ〝……」
グチャッ
その圧力に耐えられなかったのか破裂する
私は地面を蹴りあげる
そして、左手を突き出す
チノ「根源死殺《ベブズド》!!」
私の指が黒く染まる
Cの心臓のある位置に手を突き出し

根源を掴む
私はその漆黒の指で根源に傷を付ける
C「グギャアアアアアアア」
チノ「痛いですか？苦しいですか？辛いですか？
……貴様たちがココアさんに与えた痛みは
こんなものではありません！
さあ、どうして欲しいですか？」
私は根源を漆黒の指で弄びながら聞く
C「こ、殺してくれ……」
チノ「言いましたよね、楽には死ねないと」
私は根源を軽く摘む
C「ギギャアアアアアアー」
チノ「ちなみに教えてあげます
根源を傷付けることは死ぬより辛いですよ
でも、私は、自分の死より辛いことがあるので
こんなものは私にとっては児戯に等しいです」
そして、根源を潰す
C「ギャアアアアアーーーーー」
私はその様子を一瞥して、
着ていた服をラビットハウスの制服に変えて
ココアさんの元に駆け寄る
チノ「ココアさん、お待たせしました」
私は魔法陣を描き
人差し指を親指の爪で切り
血を一滴垂らす
チノ「蘇生《インガル》」
するとそこにあったココアさんの死体が消え
魔法陣から蘇ったココアさんが出現した
チノ「ココアさん！」
私はココアさんを抱き締める
ココア「チノちゃん……ありがとう！」

ココアさんは私を抱き締め返す
そして、お店の中から
避難していた皆さんが出てきました
チノ「皆さん、ケガはありませんか？」
リゼ「わたし達は何ともないが、
チノは大丈夫か？」
チノ「私は大丈夫ですよ
皆さんが無事なら問題ありません
……しかし、皆さんには悲しいお知らせがあります」
ココア「えっ？」
リゼ「悲しいお知らせ？」
チノ「まあ、静かに落ち着いて聞いて下さい
さっきの敵ですが、多分また来ます」
そこにいた全員に激震が走る
チノ「一つ方法がありますが
それはとても残虐な方法です」
リゼ「それって、まさか……」
チノ「そのまさかです」
ココア「えっ？それって……」
チノ「この世界を滅ぼすことです
守るって方法も無いわけではありませんが
私の力は滅ぼす力です
この方法が一番効率的です
そもそも侵略する場所がなければ敵も襲って来ません
そして、皆さんは私の力を見てしまったので
心苦しいですが消すしかありません」
ココア「……チノちゃん、それはどういうこと？」
チノ「言葉の通りです」
ココア「ねぇ、チノちゃん……他に方法はないの？
別のみんなが悲しまない方法が……」
チノ「……ココアさんなら、聞いてくれると思いました

ありますよ……
でも、皆さんが悲しまない方法はありません
でも、最善の方法を今から言います
しっかり聞いて下さい」
この場にいる全員が固唾を飲む
チノ「この世界を滅ぼすことには変わりありませんが
皆さんを異世界に連れて行くって方法があります
異議は受け付けます」
すると、すっとリゼさんが手を挙げました
なので、私はリゼさんを当てて発言を許可しました
リゼ「みんなって言ってるが
実際は何人まで連れてけるんだ？」
チノ「いい質問ですね
それに関してはここにいる全員と
あとはモカさんまでが限界です
しかし、この世界のバックアップを取った上で
滅ぼすならまたいつかこの世界を作れます
まあ、私は創るのが苦手なので
そこは創造神に任せます」
すると、マヤさん手を挙げる
チノ「マヤさん、どうぞ」
マヤ「あ、うん……いろいろ急展開過ぎて
追い付いていないんだけど
世界のバックアップを取ったり
異世界に飛んだりするのもどうやるのかなって思って
もしかして魔法かなって
でも、だとしたらそんな魔法が存在するのかなって」
チノ「フフフ、存在しますよ！
私が今作り上げました！」
全員「えーーーーー!!」
チノ「そんなに驚かないで下さい

まあ、その前にモカさんを回収してからですね
ココアさん行きますよ」
ココア「えっ、どうやって？
ここからだとすごく遠いよ」
チノ「瞬間移動を使います
場所はいまいち分からないので
ココアさんと一緒に行くんですよ」
ココア「な、なるほど～」
チノ「いや、わかっていないですよね
まあ、それは良いとして
ココアさんここまで来て下さい」
ココア「う、うん」
ココアさんが私の横に立つ
チノ「ココアさん、手を繋いで下さい」
ココア「チノちゃんからそう言って貰えるの嬉しいな～」
チノ「ムゥ～、そう言うのは良いので行きますよ」
私はココアさんの手をそっと握る
チノ「ココアさん、ココアさんのお家を思い浮かべて下さい」
私の中にココアさんのお家のイメージが流れ込んできました
そして私は、転移《ガトム》を使った
一瞬にしてラビットハウスの前から消えて
目の前にココアさんの実家のパン屋さんがありました
ココア「す、すごい……」
チノ「じゃあ、ココアさん
行ってきてください」
ココア「うん、わかった！」

そして、十分ほど経つと
ココアさんがモカさんを連れて出てきました
チノ「モカさん、お久しぶりです
早速ですが、行きますよ」

モカ「うん……ココアからお話は聞いたわ
チノちゃん、本当にありがとうね」
チノ「いえ、全ては私の責任です
お礼なんて良いですよ」
モカ「でも……」
チノ「もう、行きます！」
私はとても恥ずかしい気持ちになったので
さっさと転移《ガトム》を使って
ラビットハウスに戻りました

チノ「もう、始めます
手順を説明をすると
まず、皆さんを
肉体ごと連れて行くための魔法を掛けます
次にこの世界のバックアップをとる魔法を使います
そして、この世界を滅ぼして
次の世界に飛びます
以上ですが質問はありますか？」
シホ「えーと、私はどうなるんですか？」
チノ「もちろん、一緒に行きますよ
でも、神なのでそのままでも行けますよね？」
シホ「はい、多分大丈夫だと……」
チノ「他の人は良いですか？」
誰からもないようですね
チノ「ないようなのでやりますよ」
私は地面に魔法陣を展開させる
そして、作り上げた魔法を使う
チノ「根源凝縮《ラグレクト》」
すると、そこにいた全員は強い光と化したあと
球体状の物体になる
そして、私はそれを収納魔法にしまう

チノ「シホさん、ちょっと来て下さい」
シホ「あ、はい」
シホさんは私のそばに立つ
チノ「シホさんに頼みたいことがあります」
シホ「なんですか？」
チノ「今から、この世界のバックアップを取るんですが
それにはそれを写すものが必要です
なのでそれをシホさんにやってもらいたいんです」
シホ「えっ、私に出来ますか？」
チノ「根源に直接書き込むのですが
あなたは死神としては大したことはありません
ですが、神としてだったら一級品です」
シホ「ちょっと複雑ですが、良いですよ」
チノ「じゃあ、さっそく始めます」
私は二つの魔法陣を展開させる
まずは一つ目
チノ「世界読込《リ・ロード》」
上手くいったようです
続いて二つ目
チノ「根源書込《リ・ライト》」
そして、この世界の全てがシホさん書き込まれていく
チノ「シホさん、どうですか？」
シホ「なんか、身体がすごく軽くなったような気がします」
チノ「なら、大丈夫ですね
それでは滅ぼして次の世界に行きますか」
そして、私は七歩くらい先に魔法陣を展開させる
シホ「あの魔法陣は何？」
チノ「あれは異世界転移門《ディファンディング・ゲート》
まあ、どこに飛ぶかはわかりません」
シホ「えっ？」
チノ「大丈夫ですよ、私たちならどこへでも生きていけます」

シホ「そういうことにしておきます」
チノ「じゃあ、行きますよ
涅槃七歩征服《ギリエリアム・ナヴィエム　》」
一歩目で世界の書物がなくなる
二歩目ですべての生物が滅びる
三歩目で太陽、星々、月が消える
四歩目で大地が割れ、湖が枯渇、草木が枯れ果てる
五歩目で大地がなくなる
六歩目で光がなくなり闇になる
そして、七歩目で全てが無になる
チノ「皆さん、今までありがとうございました！
シホさん行きますよ」
シホ「うん！」
私たちは手を繋いで魔法陣に入りました
次行く世界で悲しき運命があるのならば
この力で滅ぼしてあげましょう！

香風智乃は勇者である編
ｅｐｉｓｏｄｅ：０２　転移したら神やら勇者やらが出てきて助けを請われました

目が覚めると私は謎の真っ白い空間にいました
辺りを見渡しても何もなく
どこまでも白が続いていました
ふと、私の足下を見ると一人の少女が倒れている
チノ「シホさん、早く起きて下さい」
シホ「う、うーん……」
チノ「起きましたか？」
シホさんが周りを見渡す
シホ「ここはどこですか？」
チノ「分かりません、私もさっき起きたばかりなので」
すると、私たちの後ろに複数の気配が現れる
咄嗟に私はＦＮ　ファイブセブンを喚び出し
隙なく構えて、振り返る
するとそこに数名の老若男女の姿があった
チノ「誰ですか？」
私はそこの人々に魔眼を向けて
彼らの深淵を覗く
チノ「……神ですか？」
すると、その中の一人の
かなり歳のいった人物が前に出る
???「御明答、流石我々が見込んだｄ」
チノ「見込まれた覚えはありませんし、
見込まれたくもないです
というか、ここから出して下さい」
???「ホッホッホッ、血気盛んでｔ」
チノ「その減らない口を針と糸で縫い付けますよ

恐らくここは結界の様なものの中で、
その中の中心の空間でしょうか？」
???「そこまで見破るとは、いやはやｓ」
私はＦＮ　ファイブセブンの
エジェクション・ポート下方のセーフティを解除する
それと同時に魔力を練り上げる
老人の眉間に照準を合わせ、トリガーを引く
その瞬間練り上げた魔力を弾丸に纏わせる
そして、銃口から５．７ｘ２８ｍｍ弾が亜音速で射出される
ドンッ
キンッ
何かに阻まれた音がした
その音のしたところを見る
するとそこには、
赤色の髪を持ち
その髪に良く合う
桜色と白の装束を身に纏った少女が
右の拳を突き出し、弾丸を弾いていた
!!!「神樹様を傷つけないでくれるかな？」
チノ「それ、木だったんですか？」
!!!「う～ん？その通りのような、
そうじゃないよな……」
チノ「でも、凄いですね
私の魔力弾を弾くなんて
パワー特化ですか？」
!!!「まあ、そうかな？
お父さんから武道を教えて貰ってたし、
プロレスとかボクシングの試合をテレビで観て
それを真似したりとかしてたな～
あっ、そうだ！
まだ名乗ってなかったね、

私は高嶋友奈、よろしくね！」
チノ「私は香風智乃と言います
こちらこそよろしくお願いします！
そしてこちらが……」
シホ「時神シホです、よろしくお願いします！」
友奈「チノちゃん、シホちゃん、よろしくね！」
チノ「なんか、ココアさんと話してる気分です」
友奈「ココアちゃん？」
チノ「ええ、私の……お姉ちゃんの様な人です！」
友奈「へえ～、会ってみたいな！」
チノ「会ってみますか？」
友奈「会えるの！」
チノ「はい、ちょっと待ってくださいね」
私は収納魔法の魔法陣を開いて、
そこに手を入れる
チノ「えっと、これですね」
中から一つの球体を出す
友奈「す、凄いね！」
チノ「ただの魔法ですよ
このくらいの魔法なら誰でもできますよ」
私はその球体に少し魔力を流す
そして、真上にあげる
球体がゆっくりと下に向かって落ちる
球体が私の肩の高さまで落ちると動きが止まる
その瞬間、球体が光り始めて
人のシルエットになる
そのシルエットが見慣れた形になった時、
光が裏返り、それが実体を現す
現れた少女が目をゆっくりと開ける
その少女が目の前の私を認識した瞬間
私に抱き着く

ココア「チノちゃん！」
チノ「ココアさん、良かったです
身体に何か異常とかありませんか？」
ココア「ないよ！なんて言うか、
いつもよりも凄く身体が軽い！」
チノ「それなら、良かったです」
友奈「その娘がココアちゃん？
私、高嶋友奈！よろしくね」
ココア「私は、保登心愛！
こちらこそよろしくね、友奈ちゃん！」
会って3秒、もう意気投合しています
流石、ココアさん
そして、とても波長の似ている
友奈さんも凄いです
シホ「あの、チノ？」
チノ「どうしましたか、シホさん？」
シホ「なんか、私、空気になってませんか？」
チノ「そう思うなら、その控えめな口調をやめて
もっと砕けた話し方の方が好感度上がって
可愛くなると思いますよ」
シホ「本当ですか？」
チノ「嘘をついてどうするんですか？
じゃ、やってみましょうか」
シホ「分かりました、やってみます」
私はシホさんを少し睨む
すると、シホさんは何かを察したように
話し直す
シホ「……う、うん……分かった」
チノ「いい感じですね
でも、まだよそよそしいので
もっと自然に話して見ましょう」

シホ「分かった」
チノ「及第点と言うことにしておきますか」
シホ「それはそうと、あの二人いつまで
話してるのかな？」
チノ「あのまま放っておくと
いつまでも喋ってますね」
シホ「じゃ、止める？」
私は頷いて二人に声を掛ける
チノ「ココアさんそろそろいい加減にして下さい
そして、友奈さん
恐らくですが、私たちに何か言いたいことが
あるんじゃないですか？」
ココア「あうっ、ごめんねチノちゃん……」
友奈「あはは……危なく忘れるところだった
うん、チノちゃんの言う通り頼み事があるんだけどね」
チノ「なんですか？」
友奈「ちょっと、助けてほしんだけど……」

友奈さんからこの世界の成り立ち
この空間の外についての話
そして、その外の話や
友奈さんがかつてどんなことをしていて
どんな仲間がいたか
また、今の状況などを
途中、神からの解説も混じえて
説明されました
そして、友奈さんから語られた話を聞いて
いくつか聞いておきたいことを聞きました
チノ「初回から凄くハードな世界に来た訳ですが
まず、聞きますが……話は分かりましたが
私たちに何をして欲しいのかが分かりません」

友奈「うん、ごめんね
まず、説明が先かな？って思って
ここからが本題なんだけど……
私たちからチノちゃんたちに頼みたいことは
『これから起こるであろう悲しみを
最小限に留めて欲しい』なって……
辛い思いをするのはもう、私たちだけで終わりにしたくて」
チノ「なるほど……了解しました」
私は契約《ゼクト》を出した
チノ「それではこちらにサインして下さい
契約内容は簡単に言うとですね
私たちのすることに最大限協力、支援をする
というものです
私たちに丸投げするのですから
断る理由はないですよね」
友奈「確かに……分かったよ、
チノちゃん、これどうやってサインするの？」
チノ「指先に念を込めるイメージで
名前を書いてみてください」
友奈さんは右の人差し指で自分の名前を書いた
チノ「初めてにしては上手いですね
それではそこの神樹も書いて下さい」
神樹「儂だけで良いのかな？」
チノ「全員書いて下さい
私書いてないので協力しませんとか
言い出されると迷惑なので」
すると神達は黙ってサインをしていきました
チノ「それではそろそろ出ますか」
友奈「ちょっと待って！」
チノ「なんですか？」
友奈「勇者システムを渡してなかった……」

チノ「必要ありません」
友奈「えーと、形式的な感じで……
一応勇者システムが
バーテックスに対抗する唯一の手段だからさ
私たちと神樹様からの気持ちってことで
受け取ってくれるかな？」
チノ「分かりました、受け取ってあげます」
友奈「じゃあ、セットするね」
すると、友奈さんは何も無い空間から
一台のノートパソコンを出現させる
友奈「それじゃあ、チノちゃんとシホちゃんとココアちゃんの
好きな花と武器を……」
シホ「私は要らないよ～」
ココア「私も要らないかな」
友奈「えっ？」
シホ「私、これでも神の一種だから
なくても戦えるんだよね」
ココア「私は今回は活躍する気はないから
いらないかな？」
ココアさんはその場でジャンプする
すると、ココアさんは光に包まれて
この姿が球体になる
そして、その球体は私の手元に来る
私は収納魔法を開いてそれを仕舞う
友奈「そうだったんだ！ごめんね気づかなくて……」
シホ「いやいや、初見で気付く人はいないから
大丈夫だよ」
友奈「えへへ、じゃあ、チノちゃんのだけでいいかな？」
チノ「はい」
友奈「じゃあ、チノちゃんの
好きな花と武器と色を決めてくれる？」

チノ「そうですね……滅び……
シホさん、『滅び』みたいな感じの花言葉を持った花って
ありますか？」
シホ「うーん？確か、
睡蓮の花言葉は『滅亡』だったはず……」
チノ「それでは、花は睡蓮、
武器は片手剣、色は……黒で」
すると、友奈さんは両手の人差し指でタイピングを始める
友奈「うん、分かった、えーと、ここをこうしてっと」
そして、一台の白色の新品のスマホを取り出し、
それをケーブルを使ってパソコンに繋いだ
友奈「接続ＯＫだね、そして、ここを押して書き込みする……
これで、書き込み完了！
はい、チノちゃん！」
友奈さんは私にスマホを手渡す
チノ「友奈さん、ありがとうございます……
神の力ですね、私とは凄く相性が悪いです
少し改良していいですか？」
友奈「えっ？うーん、多分いいと思うけど……」
チノ「安心してください、ただ私の魔力を流すだけです」
私はスマホに僅かの量の魔力を流す
すると、スマホが漆黒に染まる
そして、ゆっくりと魔力が定着し、
光沢のある黒の美しいスマホになる
友奈「す、凄い……」
チノ「大したことではないですよ
ある程度練度上げれば友奈さんでもできますよ」
友奈「えっ？できるの？」
チノ「いくつか教えましょうか？」
シホ「待って、チノ」
チノ「なんですか？」

シホ「私にも教えて」
チノ「分かりました、
これから魔法の特訓を始めます
私の指導は鬼ががってますから
覚悟して下さい」
シホ　友奈「はーい！」

そして、私は二人に魔法を
それぞれに教えました
友奈さんには飛行《フレス》や転移《ガトム》
などの比較的簡単なものを教えました
習得は早かったですが
まだまだ粗いなって言うのが正直な感想でしたが
練習を続ければかなり上手くなるなとは思いました
シホさんは元々が神なのもあって
習得も早かったですし、
高いレベルで行使していたのでかなり驚きました
なので、比較的簡単な飛行《フレス》や転移《ガトム》以外に
蘇生《インガル》、根源再生《アグロネムト》、
抗魔治癒《エンシェル》の回復系魔法
獄炎殲滅砲《ジオ・グレイズ》、四界牆壁《ベノ・イエヴン》
などの攻撃系、防御系魔法
ついでに、幻影擬態《ライネル》や秘匿魔力《ナジラ》の
奇襲などにうってつけの魔法
使えれば便利な時間操作《レバイド　》や
波身蓋然顕現　　《ヴェネジアラ》などの
実戦向きの魔法を教えました
チノ「指導は以上ですが
友奈さんは練習を続けて下さい
シホさんは今後もいくつか
教えるかも知れませんが

戦術的な組み合わせを常に考えといて下さい」
シホ　友奈「はい……」
チノ「そんなに疲れましたか？」
シホ「当たり前じゃん、慣れないことしたんだよ」
友奈「私もちょっと疲れたな
この身体、霊体？みたいなのなんだけど
こんなに疲れるのは初めてだなー」
チノ「神も勇者もこんなに……
いえ、なんでもありません
ついでにシホさんにプレゼントを渡したいと思います」
シホ「なになに？」
チノ「シホさんの武器は時神の大鎌ですよね」
シホ「そうだけど」
チノ「時間操作と言う強力な能力はありますが
鎌だと何かと戦いづらい場面が多々あるので
比較的使いやすい剣を渡します」
私は右手を前に出してとある剣を思い浮かべる
その瞬間私の目の前に黄金の剣が出現する
そして、その剣を掴む
チノ「この剣は金木犀の剣と言います
ある程度使い慣れて
剣と心を通わせられるくらいになったら
武装完全支配術や記憶解放術を使えます」
そして、私はシホさんに金木犀の剣を渡す
それと一緒に鞘と剣帯も渡す
シホ「チノ、ありがとう！」
シホさんは左腰に剣帯を装着して、
そこに鞘を嵌める
そして、金木犀の剣を納刀する
チノ「さて、そろそろ行きますか
友奈さん、ここを出たら外はどうなってますか？」

友奈「えーと、多分新しい勇者の初陣だと思うけど……
確か、神世紀２９８年だから三人だったかな？」
チノ「分かりました
それではシホさん行きましょう」
友奈「よろしくね、チノちゃん、シホちゃん」
すると、私たちの目の前に重そうな鉄製の扉が現れる
友奈「ここから出れば、大橋のところに出るよ
多分、すぐ戦闘になるから気を付けてね」
チノ「分かりました」
私はその鉄の扉を右手で押して開ける
チノ「私の力は滅ぼす力ですが、
その力で誰かを守れるなら
守り抜いて見せます
暴虐の星王の名において、絶対に！」

ｅｐｉｓｏｄｅ：０３　崩れ始めた世界

扉をくぐり抜け、一番最初に目に入った光景に
私は驚きを隠せませんでした
そこにはカラフルな風景がありました
そこを魔眼を凝らしてよく見ると神の力を感じ取れました
その後、普通に目でよくそれを凝視すると
鮮やかな色の木の根や蔦で形づくられていました
シホ「まるで、魔女の結界みたい」
チノ「確かに異様ですが、
その『魔女の結界』ってなんですか？」
シホ「知らないの？
魔法少女まどか☆マギカに出てくるやつだよ！」
チノ「……魔法少女まどか☆マギカ？」
シホ「えっ？ウソ……」
チノ「恐らくですが、私のいた世界線と
シホさんがいた世界線は違うと思うので
放送していた作品に違いがあるのだと思います」
シホ「じゃ、なんで私とチノが出会ったの？」
チノ「多分、私が死亡フラグっぽいことを
言ったのが原因で、
それによってシホさんが引き寄せられたのでしょう」
シホ「そうなの？」
チノ「推測の域を出ませんが、恐らくですそうでしょう
そろそろお喋りの時間は終わりです
敵の気配を察知しました
友奈さんが大橋と言っていたのであれでしょう」
私は数キロ先に見える、
根や蔦がかかっていない建造物を指差す
そこには大きな橋がみてとれる
シホ「あの形の橋で、大橋……瀬戸大橋？

って事はここ香川県だよ！」
チノ「でしょうね、気が付かなかったんですか？
ついでに言うとこの辺りは
結界で守られているのでしょう
大橋の先は結界が薄いですね
恐らくそこから敵を誘き出して入ってきたのを
一気に叩くと言った所でしょうか？」
シホ「大橋の先から何か来たよ……」
チノ「あれは敵ですね、初陣と言っていたので
敵の方も様子見に一体送り込む感じでしょうか……えっ？」
私はその光景を目にした瞬間、愕然としました
チノ「……三体？って、完全に潰す気ですね……
恐らく、彼女たちでは最悪全滅、
良くても一人は犠牲が出るでしょう」
シホ「って事は？」
チノ「助けるに決まってますよ
さあ、シホさん行きますよ」
シホ「了解！」

……

＞＞＞ｓｉｄｅ
今、私たちは絶体絶命の窮地に立っている
今回が勇者としての初陣だ
私の予想では偵察程度に一体だけ来るものだと思っていた
しかしそれは……
???「ウソだろ、なんで初陣で三体も
相手にしなきゃいけないんだよ」
!!!「これはちょっと……じゃなくてかなりやばいよ」
＞＞＞「ここで終わるの？」

???「弱音を吐くな、須美！アタシたちは勇者だ！」
!!!「こんな時こそ立ち向かってこその勇者だよ」
＞＞＞「そうね、そうよね
ありがとう三ノ輪さん、乃木さん」
私が覚悟を決めた時だった
迫っていたバーテックスの内の一体が音を立てて崩れ落ちた

私とシホさんは飛行《フレス》で
敵を見下ろしていた
チノ「強さは大したことないですね」
シホ「うわっ、出たよ？ｗ
強者の余裕、流石、魔王様！」
チノ「茶化さないで下さい
そもそも、事実です」
シホ「はいはい、分かってるよ
てか、思ったんだけど」
チノ「なんですか？」
シホ「あの敵、多分、連携取れないよね」
チノ「確かにそうですね
友奈さんの時代であれの手前のうじゃうじゃした
えーと、『星屑』でしたっけ？
あれを屠れる程度で
綻びのある進化体でギリギリだったみたいなので
それから考えて、
勇者側もあちら側もどちらも初陣と言うことになります
やっと進化した程度では連携は不可能ですね」
シホ「なら、さっさと殺ろうよ」
チノ「待って下さい、まず一体殺ってからです」

シホ「了解！」
私は飛行《フレス》を解除して手頃な敵に目掛けて
勢いよく落下する
それに追随するようにシホさんは地面に着地する
そして、私は黒い左右対称な形をした剣を喚び出す
その剣はただの黒ではなく夜空の様な包み込まれる優しい色だ
敵に着地する瞬間、前方に一回転し、
夜空の剣を逆手に持ち替える
そして、敵に突き立てる

チノ「ライトニング・フォール！」
するとその敵に青紫色のスパークがまとわりつく
それと同時に魔法を重ねがけする
チノ「魔黒雷帝《ジラスド》！」
すると、ゆっくり進軍していた無機質な身体を持った敵が
完全に停止し、音を立てて崩れ落ちた
私は即座にその場を離れ地面に着地する
その様子を見ていた三人の少女が
驚愕の表情でこちらを見ている
何かを察したのか残った二体も
少し後ろに下がり距離をとった
チノ「逃がしませんよ
シホさん、右側は任せます
私は左側を始末します」
シホ「ＯＫ！いけるかわかんないけど使ってみるか」
すると、シホさんの雰囲気が変わる
そして、金木犀の剣を抜き放つ
……まさか、アレを使うんですか？
習得が早すぎませんか？
流石、神なだけありますね
シホ「エンハンス・アーマメント！」

金木犀の剣の刀身にシステムが展開される
そして、刀身が無数の花びらと化す
シホ「舞え、華達！」
その言葉と同時に金木犀の剣を振り下ろす
すると、敵が金木犀の花びらに貫かれ
外殻が消滅し、
その中心にある物体……確か、『御霊』でしたっけ？
それまで破壊し尽くす
すると、スマホに通知が入る
それをタップすると勇者システムの入ってる
アプリのＳＮＳが開かれた
そこには友奈さんからのメッセージがあった
友奈：それはちょっとやり過ぎかな？
この時代の勇者システムだと
撃退までが限界だからそこまでしなくても
敵は撤退するから
チノ「シホさん、やりすぎだそうです」
シホ「えっ、そうなの？」
チノ「そこまでしなくても撤退するそうですよ」
シホ「……だとしたらやりすぎだね」
チノ「じゃ、私もやりすぎない程度に倒しますか……」
私は夜空の剣を消して
とある弓をイメージして喚び出す
その弓は全体的に丸みのあるフォルムをしている
それと同時に私の着ていた洋服が変わり
青・白を基調として所々金の装飾のある
神々しい衣装になった
そして、力も流れ込んできたが
これによりこの力以外使えなくなった
『無制限飛行』で飛び上がる
手頃な高さで静止する

チノ「ちょっと不便です
あとで改良しておきますか」
と、私はあることに気が付きました
チノ「『広範囲殲滅攻撃』である必要はないですね
『一点集中攻撃』にでも描き替えますか」
そして、弦をゆっくりと引く
すると矢の先端を中心とした部分に
システムの輪が出現する
狙いを定め、弦を一気に引き絞る
そして、離す
空間を切り裂く音が響き
亜音速で敵に迫る
キンッ
矢がなにかに阻まれた音がした
よく見ると敵の周りに障壁が現れた
魔眼でその障壁の深淵を覗くと
それが魔法であることに気が付いた
チノ「めんどくさい事になりました」
それは魔法を組み込まれてることではなく
その描かれている術式のことである
そこには『魔法攻撃無効』『外部干渉無効』『斬撃無効』
『刺突無効』とある
チノ「もう、帰りたいです」
私はそのまま、地面に着地して
能力を解除して私服に戻す
シホ「えっ？」
チノ「私の十八番が全部使えないです」
シホ「弱点はないの？」
チノ「あるにはありますが……
決定打に欠けます」
シホ「何があるの？」

チノ「ソードスキルと神聖術、心意の太刀、
あとは、勇者システムと理滅剣でしょうか？
しかし、斬撃と刺突が無効になっているので
ソードスキルは片手棍位しか使えません
心意の太刀はどういう判定になるかによって
使えなくなる可能性があります
理滅剣は魔力消費量がえげつないので
使いたくはないです」
シホ「勇者システムは？」
チノ「ステータスが下がる可能性が高すぎます」
シホ「まずは心意の太刀がどうなるか確かめよう」
チノ「ですね、やってみましょう」
私は精神を研ぎ澄まし
あの敵を『確実に滅ぼす』と言う心意を込めて
放出する
心意の太刀は障壁をすり抜け敵に当たる
そして、敵の身体が少し凹む
チノ「ダメージ量が少なすぎます
恐らく、『刺突攻撃』扱いなのでしょう」
シホ「えー……じゃ、神聖術？」
チノ「やってみましょう」
私は飛行《フレス》で飛び上がる
何を唱えるか考えた結果、全部使うことにしました
チノ「ジェネレート・オール・エレメント！」
そう言うと、私の周りに
熱素、風素、水素、凍素、鋼素、晶素、光素、闇素
の全ての属性の素因が出現する
そして、私は手を真上に掲げる
手を下げて、敵に指を指す
チノ「ディス・チャージ！」
すると、それぞれの素因が槍の穂先の様になり

敵に突き刺さる
チノ「しくじりました」
シホ「〝突き刺さってる〟もんねー」
しかし、よく見ると
突き刺さってる箇所が
ボロボロと崩れ始めていました
チノ「チャンスですね」
シホ「えっ？」
チノ「武装完全支配術と記憶解放術が使えます」
シホ「あっ、神聖術が使えるってことは、そういうことか」
私は再び、夜空の剣と青薔薇の剣を喚び出しました
そして、二本の剣を剣先を合わせ
真上に真っ直ぐ掲げる
この世界にある（と思われる）空間神聖力を
二振りの剣に集める
左手の青薔薇の剣をゆっくりと降ろし
剣先を敵に向ける
チノ「リリース・リコレクション!!」
青薔薇の剣の剣先から敵に向かい
真っ直ぐに青薔薇の蔦が伸びる
伸びた蔦は敵に絡みつき
全身に巻き付く
敵に完全に巻き付いた瞬間
蔦が光り輝き、生命力を奪ってゆく
チノ「しぶといですね（＾ω＾）
他の二体より、圧倒的な天命……生命力ですね
それなら、容赦なく行きます！」
そして、私は掲げている夜空の剣に問い掛ける
チノ（いきますよ、相棒！）
（あぁ、決めるぞ！）
チノ「エンハンス・アーマメント!!」

夜空の剣の刀身が漆黒の枝となり伸びてゆく
元の刀身の長さの何倍にもなった漆黒の枝を振りおろす
すると、振り下ろした枝から大量の闇が放出される
その闇をモロに受けた敵は
最初こそ抵抗しようと
闇を打ち消すような動きを見せていましたが
次第にその力も弱くなっていき
最後には完全に無くなりました
その瞬間、敵は崩れ去る
それを見届けたあと地面に着地する
私は、二本の剣をゆっくりと降ろし
そして、消す
チノ「少し、手こずりました」
シホ「お疲れ、チノ！」
チノ「さて、やることがあります」
私は、三人の少女の元に歩み寄る
その後ろにシホさんも付いてくる
チノ「初めまして、私は香風智乃と言います」
シホ「私は時神シホだよ、よろしくね！」
チノ「初陣を邪魔した感じになって、
申し訳ありませんでした
でも、私たちが手を出さないと
皆さんはとても危険な状態でした」
＞＞＞「あ、ありがとうございます……
えーと、私は鷲尾須美と言います」
!!!「私は、乃木園子だよ～」
???「アタシは三ノ輪銀だ」
チノ「須美さんと園子さんと銀さんですね
あー、今回の件は速やかに大赦に報告して下さい」
須美「はい、了解しました
香風さんは、一体何者なんでしょうか？」

園子「勇者の事も、大赦の事も知ってるし」
銀「なんか、怪しい……」
チノ「私は……ただの通りすがりの剣士です
私の事はどうでもいいじゃないですか
今すぐ、報告に行って下さい
三体出た事も異常ですし
最後の一体も、攻撃手段がないにしろ
防御性能がこの世界のものではありませんでした
何かが起こります
恐らくですが敵側にあの力を与えた存在がいるのでしょう
その存在と対峙するには
私の力が必要です……って、聞いてますか？」
三人を見ると、
須美さんは半分くらい理解したが
残りが理解の範疇を超えてると言った表情で
首を傾げている
園子さんは八割を聞き逃した様な表情でいるが
恐らくですがほとんど理解してる感じがします
銀さんはもう何も頭に入ってない感じの表情で
頭を抱えている
チノ「あと、追加で神樹と初代勇者と
コンタクトをとったということを伝えて下さい」
すると、樹海化が解けて元の風景に戻る
周りを見ると三人の勇者の姿が見えなくなっていました
チノ「転送されたんですね……」
シホ「なんで私たちは大橋に取り残されてるの？」
チノ「勇者では無いからではないですか？」
シホ「……納得いかない」
私は大橋の先を睨みつけ、思案する
この世界での敵……
恐らくは私たちの世界に攻め込んだ奴らの仲間でしょう

奴らは何が目的で異世界に攻め込むのでしょうか？
疑問は尽きないですが
まずは目の前のことに集中しましょう
これからの事は何も分かりません
ですが、目の前に危機に瀕しているものがあるのならば
私は戦います

ｅｐｉｓｏｄｅ０４：狂い始めた歯車

私たちは仮拠点にしているとある一軒家にいました
……未成年がどうやって家を入手したかって？
そこ気になるところですか？
と言うか、私は２００歳をゆうに超えています
確定的な年齢ではありませんが
私の元々の年齢と星王（黒の剣士）の年齢を足したものです
私の身体に星王と暴虐の魔王の記憶と力が入った時点で
私の身体の成長は止まって
そのまま二人の年齢が足されました
暴虐の魔王の分が足されていないのは
私が暴虐の魔王としてどれだけ生きていたかを
覚えていないからです
だから、確定的な私の元々の年齢と星王（黒の剣士）の
年齢を足したものが一応の私の年齢という訳です
未成年ではありません
契約？
それは、成長《クルスト》を使って見た目年齢を変えました
戸籍？そんなの適当に用意しました
お金？それは、創造魔法で金を魔力で作って換金してます
そんなことはどうでもいいです
あの戦いから数日経ったある日の事です
私たちの元に大赦の人間が訪ねてきました
用件は『神樹様の遣いの香風智乃様にお会いに参りました』
との事です
その言葉を聞いた瞬間、
私は胃の方から何かがこみ上がるような感じになりました
チノ「ふざけないで下さい
私はあんな唐変木の遣いなんかではありません
私は助けて欲しいと頼まれたからここにいるんです

その上、私が本契約をしたのは
初代勇者の友奈さんだけであって、神樹はついでです
裏切られるのが面倒だったので
そんなことも把握していないなら、今すぐ帰って下さい」
私はそう言うと、玄関を思い切り閉めました
すると、大赦の人間はドアが閉まる直前
足を挟み閉まるのを阻止した
チノ「鬱陶しいですね
立ち話もなんですから上がって下さい」
私は大赦の人間を家にあげ、客間に案内する
チノ「シホさん、お茶と茶菓子を出して下さい」
シホ「コーヒーじゃなくて？」
チノ「出したいのは山々ですが、そんな時間ありません
お茶ならすぐ出せるので
面倒なら２Ｌのペットボトルのお茶を温めて下さい」
シホ「了解！」
私は、客間に戻りました
そして、私は大赦の人間から話を聞きました
チノ「話して下さい」
玄関先では気にしませんでしたが、
ここに来た大赦の人間は女性の様でした
話によると彼女は
勇者達の通うクラスの担任もしているようでした
そして、彼女からの提案で勇者達が通う
小学校に来ないかと言われました
チノ「……私、小学生に見えますか？」
すると、彼女は恐る恐る首を縦に振る
チノ「はぁ、いつかにリゼさんに
言われたことを思い出しました
私は小学生ではないです
身体の成長が止まったのは中学三年生で

実年齢は２００歳を軽く超えてます」
そう言った瞬間、彼女のくちが口があんぐり開いた（気がした）
仮面で見えませんが、見えている筋肉の動きから
多分、空いているでしょう
チノ「ここで私から提案なんですが
勇者の指南役というのはどうですか？」
すると、彼女は驚いたように私を見ました
チノ「仮面なのに表情豊かですね
でも、普通は人と話す時は外した方がいいですよ」
彼女は一瞬仮面に手を付けましたが少し躊躇って
手を離しました
チノ「しょうがないですね」
私は椅子から立ち上がり、彼女の前に立つ
そして、彼女の仮面に手をかけて外す
チノ「結構いい顔してますね」
???「や、やめてください……」
チノ「やっと、事務的な話し方から本心が出ましたね
さて、提案なんですが……どうしますか？」
???「分かりました、受け入れます
ですが、それは大赦での立場です
表面上の立場はどうしますか？」
チノ「そうですね……副担任ってどうですか？」
???「幼すぎませんか？」
チノ「……しばきますよ」
???「申し訳ございません」
チノ「と言うか、名前聞いてませんでしたね」
???「えっ？」
チノ「名前ですよ」
???「……安芸と申します」
チノ「安芸さんですね、よろしくお願いします」
安芸「えっと、副担任という事ですが

どうにか手配しておきます」
チノ「ありがとうございます」
シホ「お茶、持ってきたよ」
チノ「遅すぎます、何してたんですか？」
シホ「えーとね、お茶探してたんだけど
キッチンの冷蔵庫になかったから
地下の冷蔵庫から持ってきたら時間かかっちゃった」
チノ「……この家、地下ってありました？」
シホ「えっ、なかったの？」
♡♡♡「しーちゃん、地下の冷蔵庫開けた？」
○○○「死亡フラグよ、わしのお茶知らんか？」
チノ「えっ？」
シホ「えっ？」
安芸「？」
シホ「なんで、二人がいるの！」
チノ「誰ですか？」
私たちの前に謎の人物が現れました
一人は白い包帯のようなもので全身を巻いたような見た目で
背中には天使のような羽が生えていて
肌も色白、髪や瞳も全体的に白い女性
もう一人は全体的にハートやピンクなどで
可愛らしい感じの少女が立っていた
♡♡♡「私の説明、雑すぎない？」
チノ「心を読まないでください
と言うか、シホさん
知ってるなら、教えて下さい」
シホ「ごめんね
えっと、包帯を巻いたの
大人な感じの人が生存フラグさんで
ピンクの可愛い感じの娘が恋愛フラグさん」
生存「おぬし、見ない間に話し方が変わったな？」

恋愛「なんか～、シホって呼ばれてるし」
チノ「名前から察しましたが、シホさんの仲間ですね
私は、香風智乃と言います
よろしくお願いします」
生存「ああ、よろしく頼む」
恋愛「よろしく！」
チノ「シホさん」
シホ「なに？」
チノ「名前付けますか？」
シホ「任せるよ」
私は少し思案しました
チノ「生存フラグさんは『天使翼』
恋愛フラグさんは『愛澤恋華』でどうですか？」
シホ「……『天使』は却下、なんかＡ○女優っぽい」
チノ「はっ？誰ですか？」
シホ「怖い怖い、ごめんて
あー、なら……『白羽聖良』はどうかな？」
チノ「良いですね、お二人はいかがですか？」
生存「ま、まあ、良いだろう
『白羽聖良』か、気に入った」
恋愛『『愛澤恋華』……うん、気に入った！ありがとう！」
チノ「……というか、皆さん」
シホ「なに？」
聖良「なんじゃ？」
恋華「どうしたの？」
チノ「服が個性的ですね
シホさんはあのＴシャツですし
聖良さんは包帯ですし
恋華さんは……普通ですが派手です」
シホ「えー、気に入ってるんだよ」
聖良「わしも、これはこれで気に入っておる」

恋華「私もかなー？」
チノ「私が嫌です、勝手に地下室作ったのは
聖良さんと恋華さんですよね？
家主の言うことを聞いて下さい」
シホ「だとしたら、私、関係なくない？」

チノ「はあ」
そう言って私は、収納魔法の魔法陣を開いて
三人のサイズに合った、黒い制服を取り出す
チノ「隣の部屋で着替えて下さい」
私は三人に制服を渡しました
そして、三人は隣の空き部屋に向かいました
チノ「それはそうと、安芸さん」
安芸「はい」
チノ「話は以上ですか？」
安芸「そうですね、特にはありませんね」
チノ「それでは、よろしくお願いします」
安芸「了解しました、それでは失礼します」
安芸は玄関に向かい、外に出ました
すると、入れ替わるように三人が戻って来ました
シホ「あれ？安芸さんは？」
チノ「さっき、帰りましたよ」
シホ「そうなんだ」
チノ「で、どうですか、着心地は？」
シホ「すごく良い……」
聖良「良い生地じゃな」
恋華「こんな服、着たことない」
チノ「当たり前じゃないですか
魔王学院の制服ですよ
私は白い方を着てましたが
白だと汚れが目立つので、これにしました」

シホ「チノも着ようよー」
チノ「いいです、私服で十分です」
シホ「えー」
チノ「うるさいですよ
それは良いので、聖良さんと恋華さん」
聖良「なんじゃ、チノよ」
恋華「どうしたの？」
チノ「なんでいるのか気になります」
聖良「それはのー……」
恋華「私たちにも分からないんだよね～」
シホ「チノがフラグを立てたんじゃない？」
チノ「ないですね」
聖良「それはわしらも思ったんじゃがな」
恋華「目が覚めたら、あの部屋でさー」
チノ「謎ですね……まあ、いいです
部屋空いてるので使っていいですよ」
恋華「地下は？」
チノ「要らないので、破壊します」
聖良「分かったのじゃ」
チノ「それでは、荷物を空き部屋に移動してください
一時間後に破壊します
急いで下さい」
そして、二人は地下に急いで行って、移動を始めました
シホ「ところでチノ」
チノ「なんですか？」
シホ「生存フ……聖良ちゃんの制服なんだけど」
チノ「それがどうしましたか？」
シホ「羽根のところ出てたけど
さっき後ろ見たら穴っぽくなかったけど、なんで？」
チノ「あー、あれは……
恐らく、形状変化だと思います

ですが、魔力を操れるか、
身体と一体化してないと出来ないですね」
シホ「って、ことは？」
チノ「魔力を高精度で扱えるという事です
どこでその技術を習得したかは不明ですが……」
シホ「私たちがいた所にはそんなものは
なかったけどな……」
チノ「まあ、その内、分かることでしょう」
シホ「その時はその時だね」

そして、一時間後
恋華「終わったよー」
聖良「チノ、あとはオヌシに任せる」
チノ「それでは、破壊しますね」
私は地下室へ繋がる階段まで降りました
一番下の段まで降りて、地下室のドアを開けました
しかしそこには……
チノ「これは、どういうことですか？」
私の眼前には何も無い空間がありました
部屋とか、そんな概念ではなく空間が目の前にありました
チノ「幻覚魔法の類いでしょうか？
しかし、魔力の痕跡は感じられません
異界にしては限定すぎる空間です」
私は少し思案し
チノ「ここに魔王城を置きましょう」
これにより、地下室問題が一瞬で片付きました
そして、置き場所に困っていた
魔王城についても解決したので一石二鳥です
私は地下室のドアを閉めて、階段を昇りました
チノ「謎が多いですが、特に問題はないので
放って置きましょう」

今、問題なのは敵の背後にある謎の組織についてです
〝あの方〟って言うのはずっと気になっていましたが
今回で少しは近付くことが出来るでしょうか
今後のことも大切ですが、
今は目の前のことに重きを置きましょう
私は、『暴虐の星王』です
目の前に悲しき運命があるのならば
この力で滅ぼすだけです
そして、私は、決意を新たに前を向きました

ｅｐｉｓｏｄｅ：０５　共にあれば、その先に光あり

色々あった、その日の夜
シホ「チノ？」
チノ「なんですか？」
シホ「せっかく広めの家なんだし
みんな出した方が良いんじゃない？」
チノ「確かにそうですね」
そして、私は収納魔法を出して
魔法陣に手を入れて九個の球体を取り出しました
私はその球体にそれぞれ少し魔力を流す
そして、真上にあげる
球体がゆっくりと下に向かって落ちる
球体が私の肩の高さまで落ちると動きが止まる

その瞬間、球体が光り始めて
人のシルエットになる
そのシルエットが見慣れた形になった時、
光が裏返り、それが実体を現す
現れた少女達は目を開ける
チノ「どうですか皆さん
お変わりありませんか？」
ココア「チノちゃん！やっと出してくれた！」
リゼ「遅いぞ、チノ
私たちをいつまであんな狭い場所に
置いとくつもりだったんだ？」
チノ「それに関しては申し訳ございません
しかし、皆さんにお伝えしたいことがあります」
ココア「なに？」
チノ「予定がかなり狂ったので
皆さんに力を与えます

ですが、大人組は保留で……
つまり、良い力が見つからなかったです
申し訳ございません
見つけ次第あげるので」
シホ「待ってチノ」
チノ「何ですか？」
シホ「整合騎士は？」
チノ「それは真っ先に考えましたが
整合騎士ってピンキリなんですよねー
強い人は途方もなく強いですが
上位とそれ以外には大きな壁がありますし
その内の第三位の力はシホさんが持っていますし」
シホ「あー、金木犀の剣ってアリスのだもんね」
チノ「後は、騎士長と副騎士長の分は
どうするか決めてますし」
シホ「決めてたの？」
チノ「そうですよ
まあ、一応ですが……
取り敢えず、決めてる分は皆さんに渡しときます」
そして、私はココアさんの前に立ちました
ココア「私にはどんな力をくれるの？」
チノ「ココアさん、そんなに慌てないで下さい」
私は右手の人差し指に記憶と力を濃縮し、球体状にして
私の魔力を少し流しました
その球体は淡いピンク色で鋭い閃光を放っていて、
その球体と閃光を包むように黒い靄が薄く膜を張っている
私はその球体をココアさんの額の部分
所謂、第三の目がある部分に優しく当て、
ゆっくりと流し込んでいきました
すると、ココアさんの身体は光に包まれ
その光が消えた瞬間、ココアさんの服装が

ラビットハウスの制服ではなく
淡いピンク色で神々しい衣装……
創世神の装具に変わり
左の腰には一振の細剣……
ラディアント・ライトが携えてある
ココアさんは姿が変わった瞬間、
腰のラディアント・ライトを抜いて、構える
ココア「創世神　ココア、参上！」
チノ「……ちょっと、痛いので止めてください」
ココア「えー、かっこいいでしょう！」
チノ「閃光、もとい創世神の記憶も与えたのに……
ココアさんの性格が変わってます」
シホ「チノ、それは違うよ」
チノ「えっ？」
シホ「黒の剣士の嫁の閃光の記憶を与えたことによって
ココアちゃんのチノへの想いと
閃光の黒の剣士への想いがリンクして、
ココアちゃんの気持ちが助長されたんだよ」
チノ「つまり、本質は何も変わってないって事……
ちょっと、嬉しいような、恥ずかしいような／／」
ココア「照れてるチノちゃん、可愛い！」
そして、ココアさんは私に抱き着く
私は何も抵抗しないでココアさんに抱き締められました
チノ「……恥ずかしいので、離れて貰えますか／／
次がつかえてしまいます」
ココア「あっ、そうだった！ごめんね、チノちゃん」
チノ「べ、別に良いですよ……
次はリゼさんです」
私はリゼさんの前に立ち、
同じように力と記憶を右手の人差し指に濃縮し、
球体を作り出しました

しかし、その球体はさっきのココアさんのものとは違い
球体自体は太陽の様に光耀き
その周りには蒼いオーラが湧き上がり
それを包むように黒い靄が薄く膜を張っている
そして、ココアさんと同じ様にリゼさんの額に
球体を流し込みました
そして、リゼさんの服装がラビットハウスの制服から
太陽神の装具に変わり、
その手にはアニヒート・レイが握られています
次の瞬間、アニヒート・レイが光に包まれて
その形がスナイパーライフル……
ウルティマラティオ・ヘカートＩＩに変化する
チノ「リゼさんは、そっちの方が様になってますね」
リゼ「チノにそう言って貰えるのは嬉しいな／／」
チノ「……恥ずかしいので次行きます！」
そして、私は同じ要領で
千夜さんには地母神と緑の剣士の力と記憶を
シャロさんには天穿剣とその力を
マヤさんには時穿剣とその力を
メグさんには……メグさん……
シホ「もしかして、チノ（´＾∀＾｀）
忘れてたの？」
チノ「えー……そのままの勢いで闇の刀出そうとして
思いとどまっただけです
あれは便利は便利なんですが
集団戦には向かないんですよね」
シホ「武具を透過してバーサーク？」
チノ「纏め過ぎですが大体合ってます」
シホ「じゃあ、神とかは？」
チノ「根源が人間ですし魔力もそこまで持っていないので
リスクが高いです」

シホ「根源母胎《エレオノール》は？」
チノ「確かに私だけでは制御が難しいので
持ってもらいましょうか」
シホ「根源降誕母胎《エンネスオーネ・エレオノール》
にした方がいいんじゃない？」
チノ「ですね、そっちの方が使い勝手がいいです
持たせるなら……モカさんでしょうか？」
私は根源降誕母胎《エンネスオーネ・エレオノール》の
術式を創造神と生誕神の秩序を喚び出し描き
それをモカさんに描き込みました
チノ「モカさん、大丈夫ですか？」
モカ「うん、大丈夫みたい」
チノ「そうですか、安心しました」
シホ「次は青山さんと凛さんだね」
チノ「諦めて神の力をあげます」
私は創造神と破壊神の秩序を喚び出し
それぞれ青山先生と凛さん心臓の位置にはめ込みました
秩序の歯車は組み込んでないので問題ないです
リスクは極力減らしたいのでそこら辺の対処はします
チノ「青山先生、凛さん、大丈夫ですか？」
青山「うん、大丈夫よ」
凛「私も大丈夫です」
チノ「すごく不安でしたが、安心しました
最後にメグさんですね
どうしましょうか？」
シホ「このまま神で良いんじゃない？」
チノ「だとしたら天父神ですか……
安定性を図るとしたら熾死王の能力……
ダメです、私が嫌です
メグさんにあんなのを与えるわけにいきません」
シホ「あとは、勇者？」

チノ「作れないわけではないですが
システムの構築とか面倒です」
シホ「そっちじゃなくて
暴虐の魔王と関わりの深い……」
チノ「カノンですか？
ありですが万が一があります」
シホ「裏切り？」
チノ「違います、メグさんに限ってそれはないです
そうじゃなくて勇者　カノンの力を見抜かれた場合
乗っ取られます」
シホ「そっちか、でも千剣の分があれば問題なくない？」
チノ「確かにそうですが
メグさんを剣にする訳にはいかないので
神殺凶剣シンレグリアは手持ちの剣にします」
私はメグさんの目の前に立ち
全ての聖剣と魔剣と勇者　カノンの７つの根源を
喚び出しました
そして、聖剣は白に近い光になり
魔剣は黒に近い光に包まれ
メグさんの身体に集い、吸い込まれていきました
７つの根源はメグさんの心臓の位置に集まり
メグさんの元々の根源と交わり元の位置に戻りました
チノ「メグさん、大丈夫ですか？」
メグ「うん、大丈夫だよ！逆に温かいな～」
チノ「色々な人の想いが込められてますから
これで千剣の勇者　メグの爆誕ということで
やっと魔王軍らしくなりましたね」
私はふと窓から外を見ました
チノ「真っ暗ですね
そんな時間経ってましたか？」
シホ「なくはないけど……」

チノ「明日から仕事なのでご飯食べてから
お風呂入って寝ましょう
皆さんの部屋は空いているので好きに使って下さい」
私たちはそれぞれ役割分担をして
ご飯を作って、食べてといつも通りの
生活を送っている中で思いました
私たちの世界でまたこんな生活を送りたい
しかし、これから始まる物語が喜びも哀しみも孕み
そして、誰も知らない結末になるとは
私を含め誰も気が付きませんでした

……

同じくらいの時間のどこかの場所

???「アイツらが失敗するとはな」
!!!「我々も期待していたのですがねー」
???「日常系の世界にあんな伏兵とはな……
暴虐の星王……面白い」
!!!「でもご安心下さい、陛下
次の世界は成功しますよ
何せ、天の神を利用してますから
奴らも自分達が利用されていると露知らず
動いているのですから」
???「まあ、慢心せぬ事だ
ゆっくりじっくり侵略して行くのだ」
!!!「ははっ、陛下の御心のままに！」

……

同じ頃、神樹内部にて

友奈「バーテックスに変な動き？」
神樹「ああ、儂らも薄々は気付いていたが
ここまでとは思っていなかった
あの者らが戦った様子を見て、確信した
天の神の後ろに何かがいる」
友奈「何かって、なんですか？」
神樹「それに関しては解らぬ
しかし、あの者らと契約は大正解のようだ
恐らく、あの者らが救世主になりうる」
友奈「なら、私たちが最大限サポートしましょう！」
神樹「無論、そのつもりだ
まあ、万が一儂らが消える時は
お主ら勇者や巫女たちの魂はあの者らに託すとしよう」
友奈「えっ？」
神樹「なに、万が一だ
やる時はやってやろう
これでも儂らは人々に信仰された土着神だ
最期の時は人々に寄り添おう」